

事故事例に学ぶ

13

直線道路での追突事故



道路工事中の作業車に気を奪われ脇見となり先行車に追突

事故の概要

発生状況

日 時：平成13年5月某日午前10時45分頃

天 候：晴れ

発生場所：静岡県沼津市内のバイパス道路

道路状況

片側2車線、アスファルト舗装の直線道路、右側車線（第2通行帯）が道路工事のため規制されていた。

事故の当事者

運転者A（10トントラック）：28才、男性

運転者B（2トントラック）：50才、男性

被害状況

A：物損...フロントバンパー中破

B：人身...頸椎捻挫（全治3週間）

物損...車両後部中破

Aは、事故当日の早朝、横浜市神奈川区内の荷主先である家電会社から電器部品を積込み、納品先である沼津市内に向かった。

高速道路から目的地近くのインターを下りバイパス道路に入ったが、交通量が少なく、片側2車線道路の左側車線を時速約60kmの速度で走行した。

走行中、前方をBが運転するフルハーフの2トントラックが走っていたが、十分な車間距離があったためそれほど気にはとめずに運転していた。

3kmほど走ると、道路中央寄りの第2車線は道路工事のため規制され、道路工事の作業現場には、作業用車両や大勢の作業員が慌しく動き回っていた。

ほんの3～4秒間その現場に気を取られ、再び前方に視線を戻したところ、先ほどまで十分な車間距離があった先行車が、道路工事の現場を徐行しているのを発見、Aは慌ててブレーキを踏んだが間にあわず追突してしまった。

事故状況

Aは小さいころから車が好きで、高校を卒業と同時に自動車整備工場で働いていたが、いつしか整備より運転に興味を持つようになり、同職場で働きながら大型免許を取得した。その後地元の運送会社に就職し、長距離のドライバーになった。

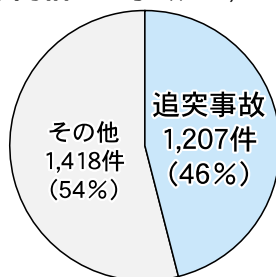
事故の原因

Aが事故当日運行した高速道路・バイパス道路は、いつもより交通量が少なくスムーズな走行ができました。それがAの緊張感や気の緩みとなり、道路工事現場の作業車両等に気をとられた脇見をし、結果、「前方不注意」を原因とする追突事故を起こしました。

追突事故の実態

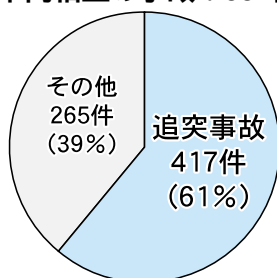
平成12年中に発生した県内の事業用トラックによる交通事故は2,886件（前年比+18%）。その内、車両相互の事故は2,625件（91%）であり、その中で追突事故が最も多く1,207件（46%）発生。県内の全事故での追突事故の比率は25%ですから、事業用トラックの追突事故がいかに多く発生しているかが分かります。（神奈川県警調べ）

県内のトラックによる追突事故発生状況（人身）
車両相互の事故：2,625件



一方、当組合の契約車両で平成12年度中に発生した人身事故は799件（前年比+15%）。その内、682件（85%）が車両相互による事故であり、その中で追突事故は417件（61%）でした。

神交共の追突事故発生状況（人身）
車両相互の事故：682件



これは、県内のトラックによる追突事故比率と比較しても極めて高い割合を示しています。

追突事故の原因

事故を起こしたドライバーに事故直前の状況を聞いてみますと、

- ・前車との車間距離を十分とっていなかった。
- ・先行車の動きや前方をよく見ていなかった。
- ・脇見や考え事をしていた。
- ・時間に追われ先を急いでいた。

等が直接の事故原因となっていました。

追突事故の多発パターンと防止策

- ・信号の変わり目に追突
黄色の信号で急停止するドライバーも少なくありません。信号が黄色に変わった時点で前車がある場合は、「前車は止まるかも知れない」と考え、徐行や停止態勢を取るような運転をしましょう。
- ・青信号で発信し未発進の前車に追突
先行車と共に信号待ちをし青信号で発進するときは、必ず前車の動きを確認し、見込み発進はしない。渡り遅れの歩行者などがあると前車は発進しないことがあります。
- ・左折途中で停止した前車に追突
交差点では横断歩道上への歩行者や自転車の駆け込みがよくあり、左折前車が必ずスムーズに進行するとは限りません。左折前車の減速・停止を予測して、適正な車間距離を保つことが必要です。
- ・渋滞でノロノロ運転中に追突
スピードが緩むとつい気が緩みがちになります。特に高速道路での追突は、正常な走行状態のときより、渋滞時に発生しています。渋滞のときこそ油断や横着をせず、前車の動向や前方の安全確認を怠らないことが大切です。

追突事故防止への事業所での対策は、「前方をよく見ること」、「車間距離をとること」といった呼びかけや、事例検討等で注意を喚起することも勿論大切ですが、月ごとにテーマを設け、今月は「交差点の追突防止」に絞り、黄色信号ストップ・見込み運転の禁止などを定め、次月は「駐車車両への追突防止」、「前車との車間距離の確認」、「前車の動きの確認」等具体的な事項を示し、日々これらが守られたかチェックし、追突事故防止に対するドライバー個々の意識を高めていくことが必要です。